R元年度　北海道真駒内養護学校　実践研究について

1．研究主題及び前年度までの課題

今年度の研究主題は、「根拠のある学習評価を目指して」の実践研究１年次である。

昨年度までの実践研究では、「根拠のある指導」を目指し、個別性、系統性の「L字構造」をおさえた上で、授業改善を行った。

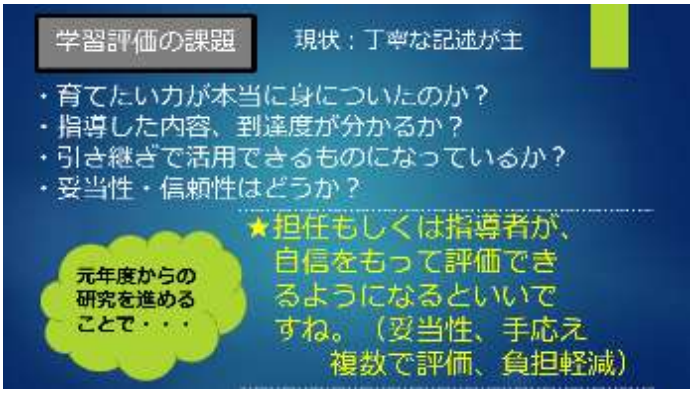
課題関連図を作成し、個別目標の設定の仕方を研修し、系統性を考えた年間指導計画の修正等を全職員で行うことができた。

授業改善の過程で、それぞれが学習評価を行い、改善に努めてきたが、学校のシステムとして、決まった方法が定まっていなかった。そこで、学習評価から次の目標設定までのシステムを構築することで、PDCA サイクルがスムーズに機能すると考えた。

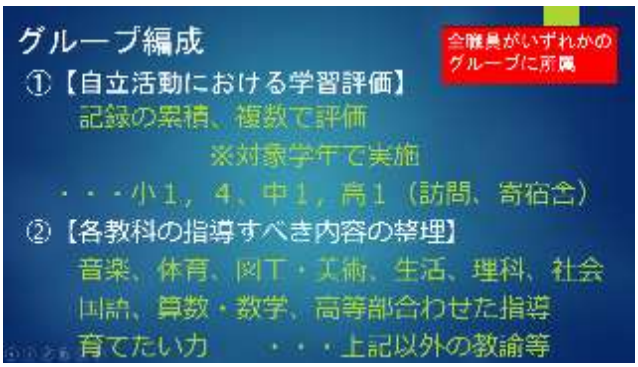
2．今年度の実践研究

上記でも述べたように、本校の課題として学習評価をテーマに掲げた。

学習評価をする際、複数の職員で記録を累積し、評価することで、担任もしくは指導者が自信をもって評価できるようなシステム作りを考えた。



3．グループ編成



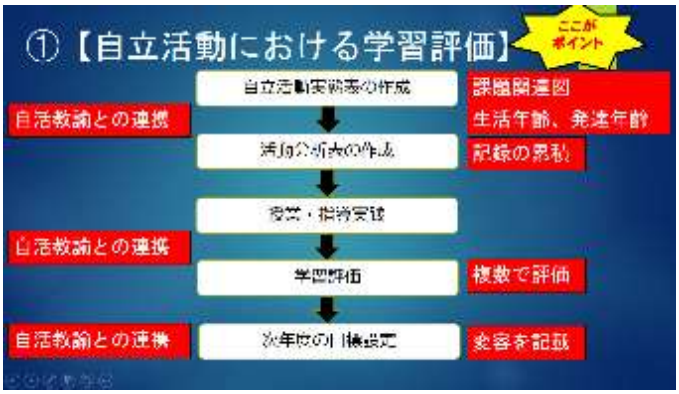
⇒研修グループを大きく以下の 2 つに分け、研修を進めた。

①「自立活動における学習評価」G

②「各教科の指導すべき内容の整理」G

※各グループ 6 名～8 名程度で構成し、昨年度同様、全職員が所属するようにグループ編成を行った。

4．グループ研修

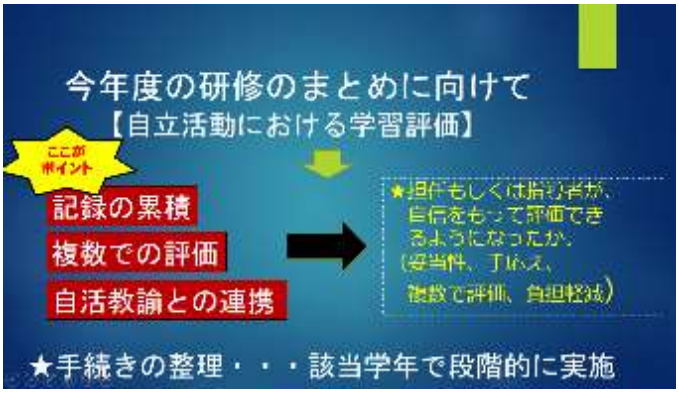


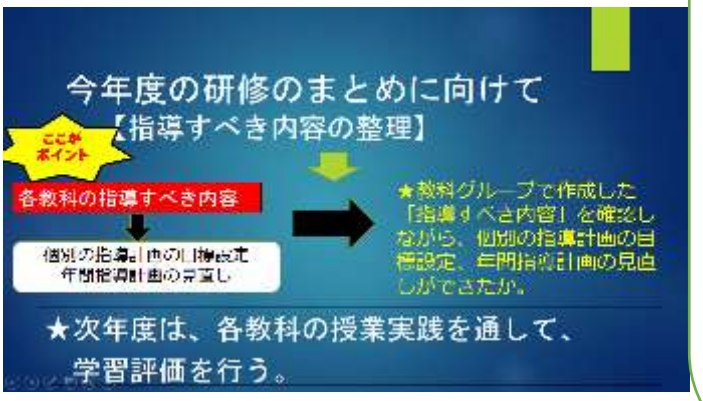
⇒「自立活動における学習評価」G では、左記の 5 段階の手続きで研修を進めた。その際、自立活動教諭と連携し、「自立活動実態表」を作成した。また、「活動分析表」を作成し、複数の職員で記録を累積し、複数の職員で評価を行った。

⇒「各教科の指導すべき内容の整理」G では、新学習指導要領から「学習内容構成表」を作成し、各教科の内容の「発展・関連図」を作成した。
※小学部１～３段階、中学部１～２段階

現在作成している年間指導計画と照らし合わせて改善点等のチェックを行った。

5．まとめに向けて





以上のような取り組みを通して、学校全体で取り組む PDCA サイクルを整理している。3 月までに整理。

- 「自立活動の学習評価」については、各グループより途中経過の発表があり、今回の研修を通して、「複数の職員での評価」については、成果が見られた。しかし、「活動分析表」については、児童生徒の実態によって活用しやすいケースと活用しにくいケースが見られた。児童生徒の実態に合わせた記録の累積の工夫が必要である。
- 「各教科の指導すべき内容の整理」に関しては、次年度の実践（学習評価）を通して検証していく。最終的には、「指導すべき内容」は、学習指導要領が変わらない限り変わらないものとし、「年間指導計画」は児童生徒の実態に合わせ毎年修正を加えるものとしたい。